

あいさつ データの重要性が見直された1年、今後のあり方検討へ

福田 和樹（文部科学省 研究開発局 地震・防災研究課 防災科学技術推進室長）



シンポジウムのあいさつに登壇した文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術推進室長の福田和樹氏は、この日のテーマを踏まえ、「大規模な集客施設においてあらゆる意味でのレジリエンスを確保することは、私たちが豊かな社会を送る上で不可欠」との考えを示し、「実際にそのような施設を所管している責任ある方々のお話を直接伺うことができる」機会として、シンポジウムでの議論に期待を寄せました。

続いて、福田氏は、データ活用の観点から2020年を振り返り、「改めてデータの重要性が見直された1年といえるのではないかと述べ、政府が検討を進めるデジタル庁の設置にも言及。「防災を含む重要な分野のデータのあり方も、検討課題として上がってくる」ことから、「その中でのデ活のあり方と、デ活を含む文部科学省の事業である、首都圏を中心としたレジリエンス総合力プロジェクトのあり方を考えていく必要があるのではないかと指摘しました。

さらに、来年度が首都圏レジリエンスプロジェクトの最終年度となることを見据え、「今後のあり方についても検討を進めていきたい」との考えを示しました。